

審査の結果の要旨

氏名 近藤光博

近藤光博氏の学位請求論文「宗教・ナショナリズム・暴力——ヒンドゥー・ナショナリスト運動のイデオロギーに関する研究」は、現代インドのヒンドゥー・ナショナリスト運動のイデオロギーを詳細に分析したものである。インド人民党（BJP）の母体となった民族奉仕団（RSS）など、連携する諸組織（サンガ・パリワールと総称される）が研究対象とされ、その全体像を描きながら、イデオロギーに焦点をしばっていく。研究の主題は、現代宗教論の観点、現代インド宗教＝政治研究の観点、そして、インド思想研究の観点に整理される。

まず、先行研究の綿密な検討を踏まえ、この運動を現代宗教論という観点からどのように位置づけるかという問題が、用語法の検討を踏まえて追究されている（以上、第1章）。続いて、民族奉仕団の前史からサンガ・パリワールの諸団体の活動に及ぶ、ヒンドゥー・ナショナリズムの歴史が述べられ、以後の論述の中心となる80年代、90年代の意義が示される（第2章）。続いて6章にわたって、民族奉仕団のイデオロギーを示すと思われる典型的な文書（書物等）を主要な素材とし、インタビュー資料もまじえながら、この運動のイデオロギーが紹介され、その特徴を包括的、構造的に示すことが目指され、その妥当性が批判的に検証されていく（第3－8章）。

民族奉仕団を中心とするサンガ・パリワールでは、「ヒンドゥー・ネイション」が一体のものとして提示され、マイノリティや女性は従属的な位置に置かれる。そしてその一体性の内実は、共有されている「ヒンドゥー的価値観」、「ヒンドゥー的生のあり方」、「ダルマ」、「ヒンドゥー教」であるとされる。このような用語を用いて、ヒンドゥー・ナショナリスト・イデオログたちは、「ヒンドゥー教」の像を描き出していくが、その際、実は西洋近代的な価値観が大幅に取り入れられている。にもかかわらず、ヒンドゥー教は歴史的に一貫して存在し、堅固な統一性をもったものであるかのように論じられていることを、近藤氏は「標準化」という語を用いて示している。続いて、イデオログたちが説く、ヒンドゥー教の没落と復興の歴史物語、「一神教」を敵として論じるやり方、文明化や近代化や開発についての見方について論じていく。

全体として、ヒンドゥー・ナショナリスト・イデオログたちは、ヒンドゥー・ネイションとインド国民国家の偉大性を示し、その組織性を強化し、文化、宗教、経済、政治、軍事などあらゆる分野で格上げさせることを目標としているとされる。また、その行動規範として、自己防衛の意義を説いて非暴力主義を否定し、あらゆる領域で多様性に対して統一性を優先させるという特徴が見られるという。そして近藤氏は、こうしたイデオロギーが外部の「敵」と見なされた人々との間の暴力を動機づけたり、差別や同化や抑圧などの構造的暴力を強化する機能をもつことを強調し、批判する（第9章）。

ヒンドゥー・ナショナリズムのイデオロギーを包括的に描き出す試みは前例がなく、丁寧にその作業をなしとげたことは本書の独自の達成である。現代宗教研究としては、厳密な概念規定を基礎に、従来有力だった「宗教復興」論の立場を的確に批判し、新しい複眼的な視座を提示した功績は大きい。資料内在的な分析に重きを置きすぎ、取り上げた資料の外部の言説や実践との関係の分析がややおろそかになるとともに、「イデオロギー」等の理論枠組みの洗練が不十分であるなど、なお今後課題を残していることは否定できない。しかし、フィールドワークの成果を背景としつつ文献資料を綿密に読み込み、暴力との関係を重んじながらその徹底的な批判を行おうとする試みは、十分に将来の豊かな研究の発展の基礎と成り得ている。よって本論文は博士（文学）の学位を授与するにふさわしい業績であると判断する。